山口剛著作集

第四

山口剛著作集　第四卷
定價三八〇〇圓
昭和四十七年七月　五　日印刷
昭和四十七年七月十五日發行
著　者　山　口　剛
發行者　山　越　豐
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四
3391―480004―4922

目次

江戸文學と都會生活　五
江戸時代の作家生活　六
江戸時代の農村と文藝　八
滑稽本について　九
膝栗毛其他について　一四
膝栗毛の事ども　二三
人情本について　二〇
爲永春水研究　二五
修紫田舍源氏について　三七
種彦と稿本田舍源氏　四一

修紫田舎源氏の書出　四四三
種彦研究　四四八
一言による斷　四八六
柳亭種彦のことども　四九二
柳亭種彦のおもひ出　五一〇
六樹園の狂歌推敲　五一三
編集後記　五二九

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

江戸文學篇　四

江戸文學と都會生活

一

江戸時代の文學をとり來りて、田園生活との交渉を論ずるは易し。都會生活との交渉を議するは難し。何を以てこれをいふ。江戸時代の文學はみながら都會に發生し、發達したる文學なるが故に、これを對象として都會生活を論議するは、つひに江戸時代文學を概説するの煩を負ふに至るべければなり。難しといふは、その內包の問題ならずして、外延についていふのみ。

もし、江戸時代に於いて、都會としいへば、江戸、京都、大阪の三ケ津以外、三百諸侯城下町のあるを忘る可らず。これ等各自の氣風あり、文化あり、生活樣式なきにあらねど、未だ特殊の文學を發生するまでに至らず。大方、その文化は、三ケ津を模倣し、文學またその流派を傳承するのみ。深くあなぐらずして可なり。まして、城下町を外にしての山間海邊に何の文化あり、文學あるべき。平秩東作が『莘野茗談』の一節は、よく當時の都鄙の生活の隔絕する狀態を盡せり。

東都などの如き繁榮の地に生れたるは、まづその人の幸といふべし。王城に生れしを三樂の一に數へけん、げにことわりぞかし。

住太夫ある時淨瑠璃の會を兩國橋河内半次郎かたにてせしに一日金五百兩集りたり。予も知る人なれば、招かれしに張札二枚つぎにて、なげし通りにあまりたり。江戸なればこそあれ。かく金銀を瓦礫の如くす。實に遊民時を得たり。これを思ふに遠國などの農民又は樵漁の屬、同じく蒼天を戴、租稅を收め御役をつとむ。衣肌を覆ひかね、豐年といへども糠にひとしきものをくひ、足手はひゞありて、いつが春やら櫻も紅葉も目にて見るばかり、地獄の中に劫數を經る罪人の如し。粒々皆辛苦といふこと古文にあり。昨日到城郭の詩など讀む度に涙のながるゝなり。

江戸時代の都會文學は、すべてこの都會生活の幸福を讃美するのみ。その比較として田舍の生活を蔑視し、その人々を嘲弄するのみ。田舍の人々、またこれを甘受して、一に都會人のなす所にならはんとす。偶文字あるもののその間にありとも、またひたすら都會文壇の趨勢に隨從せんとす。一世を擧げて都會文學といふはこれなり。

かかる折に、俳諧なる一文學樣式あり。このもの、つひに純都會の產にあらず。されば、李由は、俳諧を以て、全く山居の道具にあらずといひながら、また、解して、俳は市中にありて山林のさびしさを羨むものなりといへり。更に芭蕉の俳諧あり。これ俳諧の醇乎として醇なるもの、その精粹をさびといひ、しをりといふ。幽玄を以て生命とす。山林田園の氣に活く。彼、時に市居すといへども、山林田園に神往す。當代文學と全く異る實質を有す。

然るに何事ぞ、芭蕉の性質を具せざる者の、市居して之を學ぶ。自さびを失ひ、しをりを逸す。都會の氣、山林の氣と相鬪うて之を逐へるなり。さらば、芭蕉の正風がいかに變質したるかを說く事によりて、都會生活の何たるを示さんとするは非か。また更に、變質せしめながら、その精神に背きながら、なほ、正風の形骸を棄てかねたる事より推して、當代文學に於ける都會情調の飽和を說かんとするは非か。火を以て水を說くは俳諧の手段

なり。都會生活と文學の關係を說くに、田舍生活にもともと緣深き俳諧を以てするは、蓋その手段にならはんとするもの。もしそれ三ケ津の都會生活を、江戸にのみ卽していふは、一時の便宜に從ふのみ。

二

元祿五年、芭蕉が橘町より再興の深川草庵にうつり住みし年の八月九日、許六は桃隣を介して、はじめてその柴門を叩いて謦咳に接するを得、また同時に師弟の契約を結ぶ事を得たり。この年ごろを、とく師の君にまみえんと願ひながらいつも行き違ひとなりて、かうまで緣薄きものかとかこち居たる許六なり。また遠く彥根にありて、蕉門撰集の書を枕とし、晝となく夜となく、その風體の實を探り當てんと努め居たる許六なり。許六がその日のよろこび推して知るべし。さるにても、をかしきは、その日の邂逅なり。弟子すでにこのよろこびあるを、師のうへにもこよなき喜びを齎したり。

許六は桃隣のいふがままに、此度の旅中得る所の數句を師に見せまゐらせつ。師見終つて、「これらとりぐによし、中にもうつの山の句大きに出來たり」といふ褒美の辭あり。そのうつの山の句にいはく、

十團子も小粒になりぬあきの風

蓋、許六の心私に得意とするものなり。彼、かねて蕉門の撰集に眼をさらして模索し得たるすぢを、いひ寄せんとて、二十句ほど仕直し、二日案じ煩うて後に、「小粒になりぬ」と治定したる推敲琢磨の作なり。師、この由を聞きて歎じていふ、「愚老が魂を撰集にて索め當てたるは門弟子に許子一人のみ。晝夜、この魂を弟子に說くと雖、通じ難し。愚老が本望今日にして達し得たり」と。なほも、撰を見る事、許子に及ぶ人あるまじとかへすがへす稱してやまず。弟子、これを聞いて、一むらの疑雲の胸に徂來するあり。卽ち師にただしていはく、

「われ高翁に對面せざる前に、晋其角に點を乞ひつ。わがよしと思ふ句には、點稀にしていひ棄ての句に褒美の點あり。今日師の感じ給ふ句は、大方一點の句なり。然るに師の君殊の外に感じ給ふ。わが不審こゝにあり。師の高弟は晋子なり。師弟の胸旨、かほどにかはりてもよきものにや。わが俳諧と晋子の俳諧と符合せざるは何故ぞ。また師の風雅とわが風雅と符合するは何故ぞ。ねがはくば不審を明し給へ」と。師のいはく、「許子俳諧をすき出る時、閑寂にして山林にこもる心地するを悦ばずや、元來俳諧數寄ならずや」。弟子答ふ、「然り」。師いはく、「わが好く所かくの如し。晋子がすく所は昔てこの趣にあらず。その俳諧は伊達風流にして、作意の働おもしろきを主とす。故に晋子と許子と符合せず」と。弟子また問ふ、「わがさぐりあてし所、まことの俳諧の血脈に侍るや」と。師いはく、「この所毛頭疑あるべからず。心を正して俗をはなるゝ外はなし」と。この事、許六の再三筆錄して自讃する所なり。

許六、氏は森川、名は百仲、井伊直孝に仕へて三百石を食める大身なり。されど彼は徒に仕官榮達を以て驕る者にあらず。乘かけの後に鑓を持たせ、歩行若黨の黑羽織のすそひを風に翻さする仰々しき旅も、官命による家の格式のやむを得ざるに出づとなす。卽ち心は師の敎をかしこみ申して、椎の花の心にも似んとする者なり。うきびとの旅にならふ木曾の蠅たらんとする者なり。心ひそかに風雅の先達のまことの意を體して、破笠霜露の風にしみなんとする者なりけり。この弟子にして、はじめて師蕉翁の俳諧の血脈をまさしくも承くるを得ん。自承け得たりといふ彼の誇りは、當時人も亦許す所ありき。されば論の結着は人そのものの上に歸す。

其角の人となりに至りては、いかなれば、斯く師の君と裏うへぞと時の人も驚けり。一は曉の時鳥かけて斗酒をも辭せざるに、一は朝顏の花めでつつ飯食はんとす。こはもとより些細の末事のみ。されどまた、時の人の驚けるは、師がよく其角を知り、其角がよく師の意のある所を知り、師の俳諧の實體を解し居る事これなり。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

彼、師の七回忌追善の集を編み題して『三上吟』といふ。師の「馬上吟」「枕上吟」「厠上吟」を追懐しての命名なり。「厠上吟」とは、蓋芭蕉が世に聞えたる長雪隱なるが故なり。芭蕉ある時いふやう、「人間五十年といへり、我二十五年をば後架にながらへたる也」と。其角この事をその序に錄し、なほ追記していふ、「元より心事の安樂止靜の觀念にいたりて風骨の吟聲を脱肉せられけん。この詞厠上の活法ならずや」と。芭蕉の長雪隱を以て、その持病ゆゑとのみ見るべくは卽ちやむ。其角のこの言葉、よく師の心境にわけ入り、その玄旨に適へるものといはん。

梁田蛻巖は當時に於ける漢詩界の雄なり。この書に跋して、其角のために辯ずる所多し。その一節を摘む。いはく、

東都の晋子は其門に出でゝ藍より青き者なり。翁歿して玆に七年。庚辰冬十月十二日、其の忌辰に値ふ。乃ち同社六人を集めて懐舊七吟を作る。因て先師厠上の功夫を論じて以て其の首に冕す。晋子妻兒を帶び鹽米を莞し、酒を使ひ肉を啖ひ、毎に軟紅街の中に往來し、其の作新奇壯麗、先師の枯澹を以て範とせず。蓋能く翁の心を得て翁の跡を踐まざる者。是又世俗境中の人に非ず。否んずば則ち豈によく其の玄を窺うて以て厠上の妙を論ぜんや。

芭蕉の長雪隱は丈草にもなつかしき思ひ出の一つなれば、その三上辯に於て、言及せざるを得ざりき。しかもその辯の落想は、厠をかりて、佛經の思惟をもて『源氏』の觀相に合せたる俳諧にあり、支考が所謂虛中に實を行ひて、ここに辯者の優遊を示すにあり。こは流石にうれし。許六がこれにも芭蕉直傳とやうに、行ふはわづらはし。彼が說いて、詩歌連俳の名句も、此所より產み出し、大悟十八度も此室に入て工夫を極めりといふはよし。つくづくと、一とせのあはれを盡して、鳴くや霜夜の蛬、薦の編目をもる月夜まで、人に心はつくめりといふは

なほよし。世務所用のいとまなき身も、しばらく閉關する時は、印纓を解きて公役を許すとは、げにいひ得て妙とこそ案を拍ため。いそぎ閑居に入りて、跡を遠ざけ、半日の寂寞を樂まんと尻をかかげて走るといふに至りては、誰か啞然たらざらん。知らず、其角にかやうのふる舞ありけんか。

すでに翁の心を得て、翁の跡を踐まず。これ其角その人の性格の然らしむるものか。されど、また芭蕉の俳諧と其角の俳諧と必ずしも一致せざる理由を、地氣のけぢめより見もてゆかんは如何。其角は江戸堀江町の產にして、江戸の住なり。その生涯の大方を繁榮の巷なる日本橋に近く住ひせり。彼が池魚の災に罹りて、四谷に移りたるほどは、いかばかり侘しき月日なりけん。やがてもとの茅場町にうつりゆきたるも理なり。芭蕉は江戸の車馬の喧しきにえたへず。いはく、「長安は古來名利の地、空手にして金無きものは行路かたしといひけん人の賢く覺え侍る」と。この地を去つて、江東清適の地に移り住めり。なほも彼は、無用の辯をなす人の訪ひ來るをいとひつ。故にいはく、

朝がほや晝は鎖おろす門の垣

その閑を樂しみ、侘をよろこぶ性情は、鎖おろしたる門の內にも安住せず、つひに斗藪行旅の人となりおほせたり。これもとより芭蕉の性格より出づ。されど今その芭蕉をして、强ひて江戸に安住する事十年ならしめば如何、その都會の風にそましめば如何。或は其角の吟と似かよふふしもなきにしもあらじ。其角がその心を得ながら、直にその跡を踐まざるもの、また以て江戸の地氣の然らしむるものと解すべきか。芭蕉すでにこの理を解し、許六この理を辨へざりき。

芭蕉は、閑寂を好んで細きおのが句の姿と、伊達を好んで太き其角の句の姿と、共に並みある事をいとはず。何となれば千歲不易の相と、一時流行の相と兩端をなすものの、その本たるや一なる事を知ればなり。風雅の誠

より見る時、二にして一なるを知ればなり。都會生活者たる其角に都會の色調あるも亦風雅の誠より出づるを知ればなり。故に、其角が同門諸子と行歩を一にせざるを咎めず。去來未だこの理を知らず。

去來嘗て芭蕉に申す、「正風數次轉ず。次韻に改りて以來『瓢』『猿蓑』と變じ、『炭俵』に移る。さるを其角は不易の句には奇妙なれど、流行の句に趣を失ひ、吟跡師とひとしからず。咎むべし」と。師、其角のためにとりなしていふ、「天下に師たる者は、まづおのが形くらゐを定めざれば人おもむく所なし。これ角が舊姿をあらためざる故にして、予が流行にすゝまざる所也」と。またいはく、「角や今わが今日の流行におくるゝとも、行末又そこばくの風流をばなし出し來らんも知るべからず」と。とりなしたる人歿してすでに四年、其角に未だ流行の句なし。去來義憤にたへず、書を裁して詰る。其角答へず、その辭を少しく潤色して、おのが著『末若葉』の後序とす。『末若葉』は句の風姿、漸く正風を離れたるもの。其角のなす所なんぞ皮肉なる。許六、角が所爲を解していはく、「これはぢかしめを知らぬ故なり」と。この解果して當れりや否や。

正風の移りゆくや轉ずる毎に枯淡の趣を加へたり。芭蕉その人のあらはれか、山林田園の心か、とにかくに清閑幽邃の氣の溢るるを見る。

桐の木高く月さゆるなり　野坡

門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉

芭蕉いはく、「炭俵は門しめての一句に腹をすへたり。試に方々門人に問へば、みな泣事の、ひそかに出來し淺茅生といふ句によれり。わがおもふ處にあらず」と。其角も亦その一人か。然り、其角は門しめてだまつて寢る男にはあらず。郭公のなく音と隣の部屋の反吐のけうとき音とを同時に聞くをのこなり。されど、また彼は、よく默止の面白さを解し得るばかりに芭蕉の胸旨をわけ入りつ。ただ身みづから行はざるのみ。彼は江戸に生れ、

また江戸に住む事を樂しみ、また誇れり。されど、なほ、足一歩も江戸を離れざるが如きものに非ず。彼は生涯のうち四度京に上れり。かの芭蕉が、およそ風雅をいふほどのものは、一度は東海道を上下すべしといひけん好みにはすでに合せり。彼も亦行脚の何たるを解する者なり。

三

ここに言をなす者あり。芭蕉の行脚を非難する事頻なり。いはく、

寔や、かの翁といふ者、湖上の茅檐、深川の蕉窓、所定めず住みなして西行宗祇の昔を唱へ、檜木笠、竹の杖に世をうかれありきし人なりとや。いとも心得ね。彼の古の人々は保元壽永の亂うち續きて寶祚も今やいづ方に奪ひもて行くらんと思へば、そこと定めて住みつかぬも理感ぜらるゝ也。今ひとりも嘉吉應仁の世に生れあひて、月日も地に落ち山川も劫灰とや盡きんずなんど思ひ惑はんにも、いづこの宿なるべき、更に時雨のと觀念すべき時世なりけり。八州の外ゆく浪も風吹き立たず。四の民草おのれ〳〵が業を治めていづこか定めて住みつくべきを、僧俗いづれともなき人の、かくこと觸れて狂ひありくなん。誠に堯舜皷腹の餘りといへども、ゆめ〳〵學ぶまじき人の有樣なりとぞ思ふ。

これ、大阪に生れ、娼家に人となりたる上田秋成なり。彼は大阪といふ都會にはぐくまれたり。故にその都會をよそに見て、旅すとせば、そこに新なる享樂、色道修行なんどのためにのみすべく、一に世之介の先蹤を逐ふべきのみ。彼は『諸道聽耳世間猿』と、『世間妾形氣』とを著はして、八文字屋本に新趣向を寄せ、更に溯つて西鶴の壘を摩せんとす。彼も俳士なり。夙に几圭の門に遊び、また蕪村とも交情篤かりき。

秋成はまたその著『癖癖談』に於て、俳諧師を罵り、その行脚をあざけりぬ。

むかし、俳諧のすきびとありけり。芭蕉翁の奥の細道のあとなつかしく、はる〳〵のみちのくに下りけり。ある國の守の御城下にて日暮れなんとす。一夜あかすべき家もとむれどあらず。思ひつかれたるに、そこに門だちしたる翁のあるに、立ちよりて、懇に宿をもとむれば、翁うち見て、法師は達磨宗なるかと問ふ。否、さる修行にあらず。ばせをの翁の流を學ぶものなるが、松がうら島、象潟のながめせんとて、はる〳〵來れるなりといふ。おきな聲あらゝかにて、何某殿の御城下には、俳諧師と博奕うちの宿する者はなきぞと云ひけるとなり。いかなれば、おなじつらに疎まれけむ、いとあさましくなむ。

この俳諧師は、つひに宿かり得ねど、なほ命に別條なきが僥倖なり。『浮世床』の俳諧師に至りては、あはれにも、はかなき最期を遂げをはりぬ。

びん「おらが裏に俳諧師の坊さまが有たつけ、おめへ、知つてるだらう。錢「ム、高慢な和尚だツけ。びん「やたらにちんぷん漢ばかり云てこけを威して居たが、あいつが大笑ひよ。錢「ハア、どうしたの、いけもしねへ俳諧で、芭蕉の眞似をして、行脚に出たつけが。びん「そいつがをかしいはな、芭蕉の氣どりでの、をつな頭巾をかぶつて占者のやうな形で、頭陀袋をグツト首にかけて如意とかいふ物を手にもつて出た所はいゝが。錢「まづそこまでは御宗匠さまだ。びん「ナニが、越後の方から何處とやらへ拔る山道で野宿をしたさうさ。錢「フム。びん「その晩の内に狼に食はれ。錢「ヱ。長「狼にくはれた。びん「さうよ。錢「ヤ、とんだ事がある物だぜ。びん「そこだテ、むかしの芭蕉は名人上手で、後の世に名を殘すほどのお人だから野宿もせうし、山坂で難義もして行脚さしつたらうが、德が備つてるから、災をはらふ。今時、あの坊主などが、俳諧を仕候、行脚に出候と形は芭蕉でも、腹が芭蕉でねへから狼に食はれる。「ハ、、、、。皆々笑ふ。

斯く、並べ來れば、三馬と秋成とが、芭蕉に對する態度の上に、少なからぬ距離あるを見る。されど、今は二

人が、俳諧の行脚に對して好意を寄せざる事と、また二人が江戸と大阪との別あれど、都會生れの都會住みなる事とをいひそふれば足る。さるにてもに旅は風雅の花、風雅は過客の魂の言もはかなく笑ひ棄てられたるかな。

四

去來がいひけん樣に、蕉門の諸子の句ぶりが、數々推移する間に、何とて其角は不易の姿にてありけるか。漸く幽玄の趣を添へ來る正風の行く道を行かで、かの延寶の亂調といはるるものに停滯したるか。そもそも延寶の調とは如何。

神代もきかず百文の戀　春澄
靈寶の枕草子をふし拜み　桃青

○

もしもみつちやに戀やさめなん　杉風
岩橋の夜の小袖を引かぶり　桃青
一汗ながす谷川の月　桃青

誰かこれを見て、この桃青がかの芭蕉なる事に氣づくものぞ。

さま〳〵に品かはりたる戀をして　凡兆
浮世のはては皆小町なり　芭蕉

元祿の調と延寶の調とはかうも違ふものか。かかる戀のわびしき姿を眺め入る芭蕉となりてこそ、やがて、奥の細道の旅にして、「末の松山は寺を造て末松山といふ、松のあひ〳〵皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com